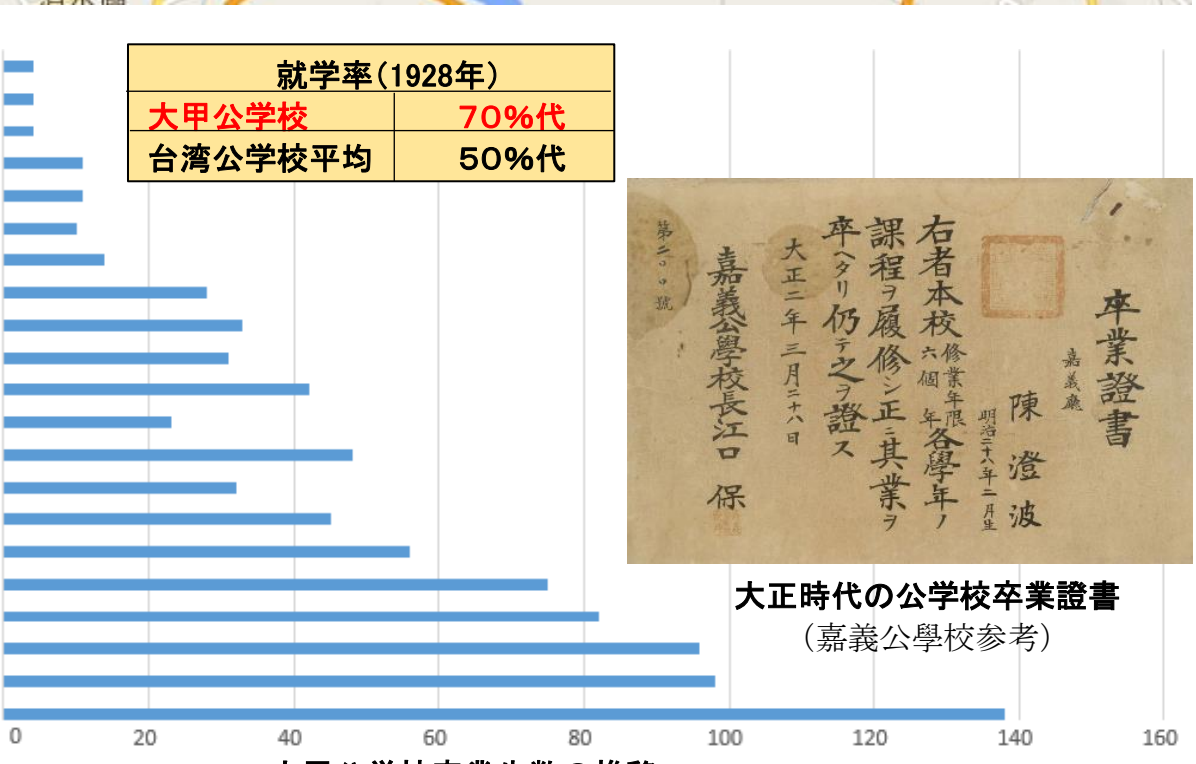
9　教育の重要性を説いて回る

年	人
M37	4
M38	4
M39	4
M40	11
M41	11
M42	10
M43	14
M44	28
T1	33
T2	31
T3	42
T4	23
T5	48
T6	32
T7	45
T8	56
T9	75
T10	82
T11	96
T12	98
T13	138
計	885



大甲公学校卒業生数の推移（「大甲鎮志」引用）

就学率（1928年）	
大甲公学校	70%代
台湾公学校平均	50%代

大正時代の公学校卒業證書
（嘉義公學校参考）

台湾では、当時、就学率が極めて低く教育に対する保護者の理解がありませんでした。そのため開校して数年は卒業生は10人前後でした。哲太郎は、これを打開するため、明治33(1900)年から毎週日曜日に、手弁当で、大安、日南、外埔、内埔まで足を伸ばし、学齢期の子供の居る家や入学しても休んでいる子供の家を一軒一軒訪ね、教育の尊さを説いて回わりました。この地道な努力により就学児童もだんだんと増えていき、大正13(1924)年には138名の卒業生を出すに至りました。昭和３（1928）年の大甲公学校創立30周年祝典時に残された文章に「日本内地の就学率は97～99%、台湾は50%代、大甲地方は70%代とあり、哲太郎の努力の跡を裏付けています。